

【Kaiさん提供】※第3節と第4節関連 ※「これからの社会主義」HP 掲載記事

◎ 1.29 第3節が削除！…「初学者には不向き」（協会の重鎮）

「働くものの資本論」向坂逸郎編著 ありえす書房 を借りてきました。

※何ということでしょう。『資本論』、第一巻 資本の生産過程、第一篇 商品と貨幣、第一章 商品の、「第三節価値形態または交換価値」が除かれているのであります。

- ・この本は、岩波文庫本で九分冊になっているものの内容を、一冊分位の分量にちぢめて、しかも、『資本論』の論旨を伝え、その意義を明らかにしようというもの、とのこと。
- ・さらに、『資本論』第一巻に重きをおいた、旨。
- ・しかし、この部分で、価値形態論を除いた。このことについては、異論が予想される。
- ・共著者たち（加茂詮、田中勝之、福田豊、成清泰道、佐藤保、篠藤光行）は、論議の末、この大事な部分を割愛した。
- ・この部分の論理は、まことにマルクスの弁証法的思考の精髓を示しているものの一つではあるが、初学者には、このような抽象的な論理の推移が、どんな具体的な歴史過程と結びついているかを理解することは、大変困難である。
- ・貨幣の成立の必然性を明らかにするこの弁証法の論理は、かえって初学者を混乱させ、退屈させると思った。
- ・そして、本書の第一篇第二章の「交換過程」は、この価値形態の内容を多少は理解させるところを含んでいる、とも思われるので、価値形態論を涙をふるって削除することにした、ということであります。

※たまたま、「読む会」で、この「第三節、価値形態または交換過程」を終えたばかりなので、何という偶然かと思い、投稿しました。

◎ 2.9 第4節 商品の物神性に関して(1)

「面白いほどよくわかるマルクスの資本論」 土肥誠監修 日本文芸社 より。

◆「商品の物神的性格とその秘密」

- ・「具体的有用労働」は市場では問題にならない。
- * 個々の労働者がつくった商品は、市場に出されることで、その人がどうやってつくったかという事実は消える。
- ・「抽象的人間労働」のみが問題となる。
- ◆ロビンソン・クルーソーの社会や、中世のように、交換価値で商品を交換しない社会には、商品や貨幣の「物神的性格」はない。
- ◆市場を通して商品が交換される資本主義になって初めて「物神的性格」が現れてきた。

* 自分の労働力を売って賃金を得る。＝自分の労働力を商品として売っている。（労働力の商品化）
・社会的に平均的な労働で、その価値が計られる。
※マルクスは、人間の生産物であった商品や貨幣が人間を支配する力（物神的性格）を持ってしまったことを暴いた。

◆ロビンソン・クルーソーの社会

- ・人間社会の原始モデル。
- ・労働はすべて自分で生産し自分で消費するためになされる。
- ◆中世ヨーロッパの身分社会
- ・身分の上下による従属関係の社会。
- ・自らの労働を提供し、商品交換は行なわれない。
- ◆中世ヨーロッパの農民社会
- ・家族が労働を分担して自給自足の生活をする社会。
- ・商品交換によるつながりではなく、共同的労働によるつながり。

◆未来社会

「共同的生産手段で労働し、自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体」としての共産主義社会。

◎2.9 第4節 商品の物神性に関して(2)

文庫ぎんが堂「あらすじとイラストでわかる資本論」より

※『商品の物神的性格とその秘密』

◆商品が価値を持って動き回る!?

「この価値の大いさは、つねに交換者の意志・予見・行為から独立して変化する。」(?)

- ・商品は謎と神秘に満ちたものだ。
- ・商品を（役立つもの）使用価値でみると、何の不思議もない。
- ・価値からみると、抽象的で謎に満ちたものになる。
- ・その謎とは？商品が価値を持ってして、社会的生産関係を反映しているということ。
- ・商品交換において、商品は役立つもの（使用価値）と価値に「分裂」として現れる。
- ・しかし、商品の交換者同士はそのようなことを意識しない。『ただ、商品には価値がある。』『そして、お金であらゆる商品と交換できる。』と考える。

◆商品が、それら自体が価値をもって社会関係を築くことを、物神礼拝（フェティシズム）という。『貨幣により、商品交換が基本の社会では、商品同士の社会関係は、人間に支配できなくなり、逆に、その関係に人間の生産過程が支配される。』

■労働が不透明（物事が隠されていたりして、実情が見えないさま）になる不思議。

- ・商品【机】～値段がつけられている。同じ値段がつけられている他の商品。→等しい価値を持つ。
- ・商品の価値を計るのは、それをつくるためにつくり手がどれだけの汗水を流したかという部分のほ
ずなのに。
- ・背後にある人間の労働を気かけなくなっている。
- ・汗水をたらして働いて生み出されたという人間的な部分が失われ、すべてが数字で表されるようになる。
- ・商品【机】は、「自分はいくらの価格の商品」という存在でしかなくなる。

※人間が背後にある労働のことを考えず、単純に「商品にはりつけられた値段分の値打ちがある。」と思うことを、「物神礼拝（フェティシズム）」とマルクスは呼んだ。

※個々の人間がつくり出した生産物は、市場に出て商品となる。その背後にある具体的な労働はまったく見えない。その価値はすべて貨幣で表示されているだけだ。→（具体的な労働は無視され）その商品そのものに価値が備わっているのだ、と考えること。→物神礼拝が起こるとマルクスは言う。